

表紙解説

表紙の石造物は『大分県のキリシタン文化遺跡』という書籍に載っている佐伯市本匠大字山部字松葉にあるキリシタン遺跡です。

今から三十数年前に発見され人々に紹介されましたが、最近ではどこにあるのか不明となっていました。

一月三十日、当時発見した芦刈さんと

共に数人で松葉に向き搜索しました。二時間余りの搜索の後、苔むした状態で発見されました。この写真は苔を取り除いた姿です。

永年の年月と谷川の流路の変更ににより元の位置より下方にありました。この二三年バチカン市国でキリスト教の古文書が発見され、県下もキリシタンブームにわきかえっています。

従来、「キリシテン遺跡」として紹介されていた遺跡が見直され、県北の方では「伝キリシタン遺跡」と呼ばれるようになってきています。

現在、発掘が終了した臼杵市の下藤遺跡や鍋田遺跡のキリシタン墓が解明され、それに基づいた考えが各地に広がってきています。

この山部のキリシタン十字のある石造物が本当のキリシタン関係のものかどうか今後の検証を待つこととなります。

これまでキリシタン遺跡と呼ばれていた十字架やトマス墓も今見直しの対象に

なっています。佐伯市には宇目の「いさの墓」と呼ばれる伏墓や宇藤木、堤内ひさぎうち(の)キリシタン墓らしきものが残っています。再度、これらの文化遺跡を確認し調査する時期かもしれません。

編集後記

会誌三三〇号をお届けします。

今回は幕末の佐伯藩の新たな事実を水戸家の文書などから研究した「鮎沢伊太夫と佐伯藩」の記事や伊能忠敬の記録を基に地元大入島の足跡を調べた研究「伊能忠敬と大入島」を載せています。

また、表紙には本匠地区山部の松葉で発見されていた切支丹遺跡が再び人々の目の前に現れ文化財保護の大切さを痛感しました。現在、大分県ではキリシタン遺跡についての見直しが各地で行われ、従前の遺跡も「伝キリシタン遺跡」と呼ばれる現状です。結果は後日の検証待ちという事になります。

史談会の来年度の行事として史談会会員を少しでも集めようと新しく「歴史口マン探検隊」と称する新たな研修を設けました。

探検隊は実働中ですが、進んで参加して戴きたいものです。

また、いままで人々が目を向けなかったような分野での研究、新たな遺跡の発掘、古文書の整理と読解等を取り組んで行きたいと考えています。皆さんのご協力を願います。

次回の原稿締め切りは七月末です。ちよつとした紀行文や民俗的な行事などもお寄せ下さい。よろしく願いたいたします。

(吉田勝重)

